

審査員  
石川 初(慶應義塾大学 環境情報学部 教授)  
大竹 由夏(ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科 講師)  
高井 啓明(株式会社竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア)  
古谷 誠章(東京建築士会 会長/NASCA/早稲田大学 創造理工学部 建築学科 教授)

## メッセー

## 石川 初

慶應義塾大学 環境情報学部 教授

建築士、つまり公的に認められた「建築のプロ」は、より広域的で普遍的な事情と、個別具体的な問題とを接続して統合し、物体や空間の形にしてみせることが求められる職能であると思います。たとえば、人間の活動が引き起こしているとされる地球規模の気候変動に対する態度と、日常生活を支える空間や家具のありようをつなげるといったことでしょうか。普遍的な問題と局所的な問題に乖離があるとき、私たちはしばしばそれをロマンチックな物語に託してしまいます。建築はしかし、そこで踏ん張って愚直に執拗に「建築にしかできない解決」に固執し、落とし前をつけてほしいと、個人的には思っています。むしろそのような個別具体的な提案と実践こそが、私たちをしてより広域的で普遍的な問題へ向き合うことを促すのだと思います。これからの建築士像が建築の実践によって更新され続ける機会がこのように持たれているのは素晴らしいと思います。楽しみにしています。

## 大竹 由夏

ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科 講師

コロナ禍における新しいライフスタイルは、人々の生活に馴染み、受け入れられつつあります。不満や不便なことも多くありますが、今までにない手軽さ、快適さや便利さを感じることもあるのではないのでしょうか。

活動の狭まる中、多くの建築士が、様々なことにトライしていたのではないかと考えます。このような時代に生まれた興味深い計画は、革新性のあるもの、この時代を見据えたもの、柔軟性の高いものだと思います。そして、そのユニークな作品が、今日、一歩二歩と発展している頃かと思います。

これからの建築を牽引していくような作品の応募を期待しています。

## 高井 啓明

株式会社竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア

今回から審査員を務めさせていただくことになりました。私は長年設計実務を、主に建築の環境面から行ってきました。

社会的には、人口縮減・少子高齢化していく日本において、既に多くつくられてきたストックとしての住宅・建築やまちがあります。その中には使われなくなったり、劣化が激しく使用に堪えられなくなって、残置されているものも多くあります。どう再活用するのか、改修するのか、あるいは壊して緑地等に再編するのか等ありますが、これらが一向に進まず、社会課題になっていると思います。一方でこれから先を見ますと、「2050年脱炭素社会を目指す」と、国や自治体、産業が急速な転換を宣言する中、建築分野でも脱炭素社会の住宅・建築のあり方が議論されています。国の排出量の約4割を占める建築分野ですから、建築士の果たすべき役割はたいへん大きいわけです。ここでもストックでどう排出量を減らしていくかが大きな課題となっています。しかしながら国や自治体は基準の数値や再エネ普及をどうするかという議論が主で、具体的な建築の実施は、もっぱら建築主や住まい手、建築士や建築関連資格者等に委ねられています。

このような状況の中、未来の環境に資する、発注者や住まい手、地域を巻き込んだような活動と実践など、「これから」を予感させ、一石を投じるような応募に期待しています。

## 古谷 誠章

東京建築士会 会長/NASCA/早稲田大学 創造理工学部 建築学科 教授

西欧で古来3大職能とされるのは「医者」「弁護士」「建築家」。日本の国家資格としては医者は医師、建築家は建築士にあたる。3大職能と言われても、医者や弁護士とはどこことなく趣が異なるのが建築士の実感だろう。なんとなく羽振りの良さも違うような気がする。思い当たるのが、医者や弁護士は、クライアントが、その人生の中の不幸な局面で訪れてくる。怪我をした、病気になった、具合が悪い、事件に遭った、トラブルに巻き込まれた、離婚だ等々、意気消沈し、気弱になって専門家を頼ってくる。いきおいその立場は患者や依頼者の方が弱い。

一方でわが建築士の場合は、依頼者がその人生の最も幸福な時にやってくる。自宅を建てたい、新社屋や工場を建てたい、店を開きたい、依頼者の方には勢いがあり、元気がある。道理で立場も強い訳だ、コンペで競わされたり、設計料の相見積もりを取られたりする。なるほどそれでこちらの分が悪いのかなどと嘆いたりする。

それでも幸福な人の幸福な夢を実現するのも十分立派な仕事だと思っていたが、しかし、阪神淡路や東日本大震災が起きて、改めて建築士にも医者や弁護士のような使命があることに気づかされた。家族を失ったばかりか、家を失い、街を失った人々の力になれるのもまた、建築士の尊い使命である。あるいは失われゆく自然環境や風土、消えゆく地域文化や歴史を次世代に引き継ごうとするのも、われわれになし得る大いなる役目である。

私が思っても見なかったような「これからの建築士」に出会うのを心から楽しみにしている。